D 18　住宅内空間の構成変化と日常的生活における部屋などの使われ方からみたその要因（大阪府能勢町天王の事例）ーとくに更衣・食事・入浴などの生活過程について

大阪工業大　塩谷寿翁

目的・方法：住宅内空間の構成にあらわれた連続性と変化とを昭和30年代と50年代にわたる時期の前後で捉え、その要因を日常的非日常的な住宅内生活の諸側面から探る。小稿では、表題の農村住宅の実態調査[1]の結果を基に、①「原初型」[2]の平面型式の展開動向を探り、②その規則性と要因の一端を更衣・食事・入浴などの生活過程における部屋などの使われ方から事例的に追究する。

結果の要約：①能勢地域の「妻入縦割民家」は接客生活に使われたとみられる表側空間（座敷部分）と内側空間（納戸・台所など）の部屋などの分化・統合を重ね、妻入から平入に変わる発展を継続してきた[3]。対象住宅の主屋の平面型式は、その発展系統で生じた前座敷・鍵座敷・縦座敷などの表側空間の部屋配列を保ち、内側空間では部屋などの分化が上の時期になお継続して行われている。②この空間形成には個人（夫婦）生活・家族生活に関係した行為の場が表側空間と隔離される規則性が保たれている。③その要因の追究は日常的な接客生活および非日常の生活の諸側面での部屋などの使われ方およびその生活的意味の解明から可能になる、と考えられるが、一部は、更衣および更衣に関係して順序性をもつと考えられる「食事」「入浴」などの生活過程における部屋などの使われ方の形態から説明できる。④更衣の場は、内側空間の位置を保ちつつ、一部で土間部分・別棟などが使われるように変化している。それらは「原初型」の構成原理の一部が、現代化する生活に対応する意味を持ち、保たれ存続したものと考えられる。

(1)期間は昭和59年8月から現在に及んでいる（全58戸のうち31戸を精密調査）。　(2)採取平面における建築後の更新から推測される建築時の平面構成の型、増改築の経緯よりみて、昭和30年代以前に保たれていたとみられる。　(3)一部は、拙稿「農村住宅の平面構成の展開動向と日常的な生活過程よりみたその要因（大阪府能勢町歌垣地区和田の場合）」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第24号、昭和60年 5月,pp.449~452で取り上げている。